

拝啓

涼しい季節が待ち遠しい今日この頃。〇〇様はいかがお過ごしでしょうか。

あれから半年以上が経ち、ほとんどの期間を家で過ごすことになりました。部屋から一步も出ない日があり、気がついたら晩夏になっていて驚いています。部屋に籠ることは、自分を守ることでもあります。桜の花びらが舞う風の流れや、日陰に入ると肌寒く感じる気温など春を思わせる体験を喪失させるものでした。今年は、多くの風物を感じられないのでしょうか。冬眠する生き物たちが、寒い日に温かい鍋をつつく団欒を知らないように、初めて季節を忘れてしまうほどのことが起きているのかもしれませんが。ある国では、冬眠から目覚めた熊は春を知らせてくれる使いのものとして祭りの主役となるそうです。熊が春の知らせと分かる以前は、無秩序にも予感に満ち溢れた世界だったのでしょう。

クロード・レヴィ=ストロースの『野生の思考』には、「呪術は科学の隠喩的表現」という興味深いことが書かれていました。呪術は、科学と違い数学的解析が行われてはいない。しかし、全体を包括する因果性を把握することで、行き着く先が科学と同じとなることもあるようです。無意識的であっても、ある因果を感じることによって科学と同じ結果となるのでしょうか。予感を感じることは、ある因果関係を無意識的に選びとろうとする手前の状態だと思えます。予感に満ち溢れた世界が、目の前にあると実感できたならば、それはもう呪術や魔術みたいなものだと思いますか。科学か呪術か、どちらかを優位とするのではなく並列された関係として世界を見渡すことが可能ならできるかもしれません。

自粛期間が明け、人々が家から出て街が活気を取り戻した光景を目にした時、季節外れにも春が来たと思えました。冬眠から目を覚ました熊が現れたように、これまでとは少し違った春、新たな時間と空間が折り重なってできた季節が来たようです。けれども、その到来を喜ぶにはまだ早いような気がしています。僕が無数にある予感を選び取れずにいるからなのか、仮初めの祝祭に疑いをもっているからなのか、或いは両方か。ただ、もう少しだけ冬眠していたい気分だけなのか。

夏の疲れが出てくる頃です、お体にお気をつけてお過ごしください。

敬具

2020年8月7日

守屋友樹

〇〇様